



俺のチンポは小さくない。むしろ平均よりも大きいレベルだと思う。長さは17センチだし、太さもある。亀頭も極端に小さくはない、硬さもしっかりしている。包茎で耐久力はないが、そこら辺の男よりは良いモノを持っていると自負していたが、レイジのデカチンを見せつけられると、俺の自信は一瞬

で崩壊した。レイジのモノは俺よりも遥かに格上のデカデカチンチンだ。

「どうよ!?俺の自慢のズル剥けデカチンは!?そこの包茎野郎とは全然違うぜ!」

「あ・・・ああ・・・ああ」

ファリスも極上のデカチンポを前にドエロい雌の顔を晒（さら）していた。レイジは腰に手を当てて仁王立ちのスタイルをとると、デカチンをファリスの眼前にズイッと出した。

「なあ、気持ち良くしてくれよ」



「あむう」





迷うことなく、レイジのデカチンを口いっぱい頬張るファリス。


（んがあ★ファリスのヤツ！全然躊躇してねええ★いきなり他人棒にむしゃぶりつくなんてええ★彼氏の俺が見てるのにいい★）

「おふう❤️お口、気持ちいい❤️おほっ❤️ファリスちゃん、フェラチオ上手じゃん❤️」

ファリスはレイジの太もみにしがみつき、頭を前後に大きくスライドさせてレイジのデカチンを愛撫した。頬で亀頭を締め上げ、舌でカリ裏を舐め回し、喉奥でシゴく。

（大きさが・・・全然違ううう  ハマーのチンポと・・・全然違うう  ）





「んぼんぼんぽんぽん  ちゅっぷ  じゅっぷ  ちゅぽちゅぽ  」卑猥なフェラ音が響く。

「アヘアヘアヘアへへ   」

よほど気持ちがいいのだろう、レイジは舌を出し、アへ顔で涎を垂らして下半身をガクつかせている。

「んぶう  すっごい  まだ大きくなるう  チンポデカ過ぎるう  」

「んぼんぽん  ちゅぷ  じゅぷ  れろれろ  」

「うひひ  舐め方エツロ  興奮してきたろ!? オマンコ、ビチヨ濡れじゃねーかよ  ほら、また手マンしてやんよ  こっちこい！」そう言うとレイジはフェラチオをいったん止め、ファリスを立たせて、2人

で俺のそばまで来ると、ファリスの尻を俺に向け、後ろから右の中指と薬指の2本を挿入し、一気にかき回した。

「ヌチュ♥ニチュ♥ニチュ♥ヌチュ♥ヌチュ♥」  
ビチュビチュと潮を飛ばすエロマンコ。

「ああ♥ん♥あん♥あ♥♥♥」  
乱れ飛ぶ潮が俺のチンポにかかりまくる。

「んぐう！むぐぐう！んがが！ふんがああ！」  
（おへえ！イキそお！がまん！しなきやあ！）

「びちゅ♥びちゅちゅ♥びちよびちよ♥」  
「ぎぎぎぎぎぎ！んがむがあ★★★!!」

（ギギギギギギ！イングウウ★★★!!）  
猿ぐつわを噛み締め、耐えようと試みる俺。

だが、不意打ちとも言える衝撃が俺を襲う。

「うおおお★あああああっ★!!」  
「ドピュ★ドピュ★ドピュ★ピュ★ピュルル★」

俺は予期せず射精してしまったのだ。  
それも自分で触ることなく勝手に・・・。

「なっ!？」

レイジも驚いた様子だったが、すぐに笑い出した。

「なんだ？お前、まさかこの状況だけでイっちゃまったのかぁ!？」

恥ずべきノーハンドマゾ射精。

自分がこれまでに軽蔑していた行為だというのに、今まさに俺自身が犯してしまった事実。

全身から血の気が引いて行く感覚・・・。

だが、それ以上の屈辱感と達成感のような相反する感情が俺の中で交錯していた。

「あはは、コイツ！チンポ、イッタ！チンポ、イッタ！ゲラゲラ！こらえらんねゝのかよ!?!ゲラゲラゲラ！雑魚チンポくん、無様に昇天でゝす!!お仕置き確定だな！こりや笑」

レイジはそう言うと、ファリスの腰を落とし、ファリスのデカケツを俺の顔面に向けると、再度高速の手マンを見舞った。

「ビチュチュ♥ビチュビチュ♥」

「ひいい〜❤️出ちゃう〜❤️」叫ぶファリス。

今度は俺のチンポではなく、顔面にファリスのエロ汁がぶっかかる。数秒で顔面を潮でビチョヌルにされる俺。

「んんん！ぶ〜！ぶぶあ〜★★★」

白目を剥いてヒクつく俺。興奮は最高潮だ。

「あははは！どうだ？お仕置き顔面への潮ぶっかけは？ってマゾにはご褒美か？ゲラゲラ」

「も、もうガマンできない❤️レイジ・・は、早く、早く、オチンチン挿れてえ❤️」

とうとう、自分から懇願し、レイジのデカチンを求めてしまうファリス。

「ああん？彼氏の前だけど？いいのかよ？」

「も、もうガマンできないのお❤️貴方のデカチンポで気持ち良くしてよおお❤️」

「だってさ！彼氏クン。そんじゃあ、彼女のオマンコいただきます〜す❤️」

「うがああ★★うほお★★うほお★★」



(うそおお★まっつて★まっつてえ★)



「へへへ❤️ここまで濡れたら、俺のデカチンもズツ  
ポし入るっしょ❤️」レイジはそう言うと、俺の眼前  
でファリスの左足をあげ、オマンコを大きく広げ  
た。美しいファリスのオマンコが汁をダダ漏れさせ  
ながら、パクパクと物欲しそうに蠢いている。